早稲田大学審査学位論文(博士)の要旨
3257-2

W
学位論文
3257
2

博士（人間科学）学位論文 概要書

対人的信頼感に関する発達心理学的研究

２００２年１月

早稲田大学大学院人間科学研究科

酒井　厚

指導教授　春木　豊

本論文では、児童期から青年期の“対人的信頼感”に関して、その形成・発達に関する理論的枠組みを再検討し、様々な他者との対人的信頼感が果たす社会的な機能について検討した。

本論文の主な目的は以下の3点である。

1) Erikson(1950)や Bowlby(1973)による“対人的信頼感”に関する理論を参考に、対人的信頼感を、“自分が相手にとって信頼される価値のある存在である”
という自信の程度を示す「自己評価」と、“相手が自分にとって信頼する価値のある存在である”という信頼の程度を示す「他者評価」の2次元から捉える尺度の作成を通じて、児童期から思春期で見られる広範囲な対人関係での“対人的信頼感”について包括的に検討する。

2) 双生児サンプル（381組）および生後15年間の縦断サンプル（277家族）という2つの調査研究において1）で作成された尺度を用いて児童・思春期における子どもたちの対人的信頼感の測定を実施し、対人的信頼感の形成・発達に影響する要因について、環境的な要因と遺伝や気質などの生得的要因の両者による影響の観点から、縦断的および横断的な検討を行う。

3) 1）と2）により検討された“対人的信頼感”の形成・発達に関する知見を基に、父親、母親、きょうだい、親友、恋人といった多様な対象との間に形成される 対人的信頼感と社会的適応や精神的健康との関連について、児童期から青年期までの広範な年齢段階について検討をおこなう。

まず、第1の目的に関しては、児童・思春期および青年期における多様な他者との信頼関係を、「自己評価」と「他者評価」の2つの下位尺度から評価できる尺度の作成を試みた。その結果、「自己評価」と「他者評価」をそれぞれ測定するように構成された項目は、青年期における母親・親友・恋人・一般的な他者との各関係、児童・思春期においては、子どもにとっての母親・父親・きょうだいとの信頼関係と、母親および父親にとっての子どもとの信頼関係という多様な対人関係において、因子分析により仮説どおりの2次元構造として抽出され、確証型因子分析からその構成概念妥当性も認められた。第2の目的に関しては、上記の2つの調査を用いて、対人的信頼感の形成・発達に影響する要因を環境的な要因と遺伝や気質などの生得的要因の両者による影響の観点から横断的および縦断的な検討を行った。人間行動遺伝学的手法などを用いた結果から、児童・思春期の子どもが親に抱く対人的信頼感には、同時点での子どもの生得的要因（遺伝的要因・気質的要因）と環境要因（親による「養育態度の暖かさ」・夫婦関係の良さ）の両方が影響を与えていることがわかった。

また、縦断的な検討からは、先行する時点（乳児期・児童期前期・児童期後期）の母子間の信頼関係が、思春期の子ども（中学生）が母親に抱く信頼関係評価（「自己評価」・

「他者評価」）にどのような影響を与えているかについて共分散構造分析により検討した。その結果、児童期後期の子どもによる「母親との良好な信頼関係」が、子どもが思春期の時の母親による「子どもとの良好な信頼関係」を予測するという結果は得られたものの、中学生の子どもが母親に抱く対人的信頼感には、乳幼児期以降のどの時点の母子間の信頼関係も有意な影響を示していなかった。

第3の目的に関しては、児童・思春期における多様な他者との信頼関係のあり方が、この時期の青少年たちの精神的健康や学校への適応にどのような影響を及ぼしているかについて検討した。その結果、父親やきょうだいとの信頼関係が、親による虐待や学校でいじめられるなどの比較的深刻なイベントに対して精神的健康度を保つ重要な防御的役割を果たすことが示されたり、とりわけ親友との間の信頼関係は児童期以降の子どもにおける学校適応などの社会性の発達に大きな影響を与えていることが示された。

以上から得られた結論は以下の4点である。

結論1：他者への“対人的信頼感”は、Erikson(1950)の生涯発達理論とBowlby（1973）の内的作業モデル理論に共通して構想されたとおりに、“自分が相手にとって信頼される価値のある存在である”という自信の程度（「自己評価」）と“相手が自分にとって信頼する価値のある存在である”という信頼の程度（「他者評価」）の2次元で測定し得ることが明らかになった。また、この対人的信頼感の2側面（「自己評価」と「他者評価」）は、相互に関連しつつも、それぞれに固有の特徴を持つことが実証的に示された。

結論2：児童・思春期の“対人的信頼感”の形成・発達には環境要因と遺伝要因の両方が関わっており、それぞれの影響力は、子どもの成長に伴い変化していく。

結論3：乳幼児期に母親が評価した母子間の信頼関係は、児童・思春期の子どもの“対人的信頼感”に直接的な影響を及ぼさないことが示され、乳幼児期の母子関係の長期的効果はここでは認められなかった。反対に、児童期の子どもが母親に抱く対人的信頼感は、思春期になってからの母親が子どもに抱く対人的信頼感に影響するという結果が得られ、母子間の信頼関係については、親子相互からの視点を考慮する必要がある。

結論4：児童期から青年期の青年が円滑な社会生活を送るには、父親、母親、きょうだい、親友、恋人といった多様な存在との信頼関係が重要である。